Ⅳ-246　都市河川における水辺空間の整備方針に関する研究

早稲田大学大学院　学生員　柳原　和弘　　早稲田大学理工学部　正員　尹　祥福
早稲田大学大学院　学生員　赤松　宏和　　早稲田大学理工学部　正員　中川　義英

1.はじめに

人々の生活の中で大きな役割を担ってきた河川は、近年の都市化による影響を大きく受け、その本来の姿を失いつつある。そのようななか、治水・利水機能に加えて、本来河川の持つ親水機能が重要視されてきた。

このような背景をふまえて、都市河川を対象として今日の時代に適した河川の整備方針を模索し、考察を加えていくことを目的としている。その際、現在行われている整備方法の中から「親水公園」と「多自然型川づくり」を取りあげ、ヒアリング調査を行い、その結果をもとに今後の整備における指標の作成を行う。

2.現況分析

本研究で取りあげる親水公園、多自然型川づくりの概要及びその相違点についてを表１に示す。

本研究では親水公園、多自然型川づくり、それぞれ１ヶ所ずつを対象地区として選定し、ヒアリング調査を行った。

小松川境川親水公園は周辺の下水道整備に伴い1985年に総延長3.2km、平均幅員12mで完成した。その後延長され現在では約4kmにも及ぶ公園がそれぞれがテーマをもった５つのゾーンから構成されている。

表１　親水公園、多自然型川づくりの概要

	親水公園	多自然型川づくり
概　要	「都市の海や河川などの水辺を市民に開放し、水に親しむ機能を持った公園、緑地」と定義されている。	人間生活と調和する豊かな自然の保全と創造のための試みであり、単なる自然保護ではなく、積極的に自然を再生しつつ水辺づくりを進める考え方を基調としている。
はじまり	1974年に江戸川区で古川親水公園が完成してから現在では全国に広がってきている。	1992年に建設省が「『多自然型川づくり』の推進」を打ち出してから盛んに行われるようになってきている。
目　的	・川の自然環境の回復 ・レクリエーション環境の創出	・本来、川がもつ自然環境の保全、創出、再生
対象河川	・主に都市内の中小河川 ・昔の水路（農業用水路、輸送水路）などの復元	・河川の場所、規模に大きな特徴はない
人と川との関係	『人にやさしい河川の整備方法』 ・人が主体 ・人にとって安全で遊びやすく整備 ・川は公園の遊戯施設の一部	『川（自然環境）にやさしい河川の整備方法』 ・川（自然環境）が主体 ・川からの恩恵を人が受けるように整備 ・公園的な機能は整備の副産物

いたち川は1982年からの改修工事で現在までに約3kmの再整備を完了している。改修工事では河川の断面を複断面化し水の流れる低水部と草の生える陸部を形成したりするなど様々な工夫がなされている。

3.ヒアリング調査結果

ヒアリング調査の回答者は、小松川境川親水公園52人、いたち川56人であった。

ヒアリング調査の単純集計結果において、２地区で大きな違いが出たのは「誰と何人で来たか」「利用時間」「利用目的」の３項目である。

また、今回のヒアリング調査で最も重要視していた項目は「親水公園と多自然型川づくりではどちらを望むか」である。そこでクロス集計を行い利用者特性などの他の項目との関係性を調べた。クロス集計結果において、特徴が見られた項目は、「一緒に来た人」、「所要時間」、「利用目的」、「整備されて変わった点（まち

表２　ヒアリング調査単純集計結果

項　目	小松川境川親水公園	いたち川
性　別	女性が多い。60%以上。	女性が多い。80%以上。
年　齢	30代、60代が多い。共に30%程度。	30代、60代が多い。30代25%60代30%程度。
誰と何人で来たか	家族、2人以上の利用者が大半を占める。	1人での利用者が半分以上。
所要時間	5分以内から30分以内にほぼ含まれる。比較的遠くから来ている人もいる。	5分以内から30分以内にほぼ含まれる。
利用時間	1時間以内、3時間以内といった長時間利用者が多い。	15分以内が半分程度と比較的短時間の利用者が多い。
利用頻度	月1～3回も4分の1程度いるが利用頻度は高いと言える。	だいたい毎日と週1～3回にほぼ含まれる。
利用目的	散歩、休息が大半を占める。その他の利用者も子供と遊ぶなどである。	散歩、通り道での利用が大半を占める。その他の利用者も買い物などの通り道である。
整備されて変わった点	全ての項目で50%以上がそう思うと答えている。中でも景観の美化の評価が高い。	全ての項目で60%以上がそう思うと答えている。
改善してほしい点	自然な川という項目で要求が高い。満足度は50%程度がそう思うと答えている。	公園の設置という項目で要求が高い。満足度は40%程度がそう思うと答えている。
親水公園と多自然型川づくりではどちらを望むか	ほとんど同じ割合で公園と自然とに別れた。	自然を望む方が60%程度と少し高い割合である。
事故が起きた場合の責任	自分たちの責任と考えている人が70%程度その他ではケースバイケースが多い。	自分たちの責任と考えている人が60%程度その他ではケースバイケースが多い。

Keywords：都市河川、水辺空間、整備方針
〒169　東京都新宿区大久保3-4-1　Tel.03-5286-3398　Fax.03-5272-9975

が活性化された）」、「改善してほしい点（十分満足である）」の５項目である。

表２、３に調査結果をそれぞれまとめた。

4.今後の整備における指標の作成

ヒアリング調査の単純・クロス集計結果において、特徴が見られた項目をもとにして次の７つの今後の整備における指標を導き出した。

①人口密度　②１世帯当たり人員　③年齢別人口
④世帯人員別世帯数　⑤地域内の学校数
⑥地域内の駅数　⑦地域内の公園数

これらの指標を、今後整備を行う場合に「親水公園型川づくり」と「多自然型川づくり型整備」とのどちら整備方法が適しているのかの判断基準として用いることができる。

作成した指標とヒアリング調査の集計結果とのそれぞれの関係を図に示す。

この図より、指標と調査結果の関係、および各々の指標の特性を知ることができる。

表３　ヒアリング調査クロス集計結果

項　目	小松川境川親水公園	いたち川
性　別	割合は男女ともほぼ同じ。	女性は自然を望む人が多い。男性も割合的には自然が多い。
年　齢	60代は公園、20代、40代は自然が少し多い。30代、50代はほぼ同じ。	30代ぐらいまでは公園を、それ以上の人は自然を望む傾向にある。
一緒に来た人数	人数によって大きな差は見られない。	人数によって大きな差は見られないが、3人以上は公園がとてもよい、1人は自然がとてもよい、という答えが多い。
一緒に来た人	家族が最も公園を望んでいて60%を超える。友人は逆に自然が多い。1人での利用者は公園、自然が半々である。	家族が最も高い割合で公園を望んでいる。友人、1人の順に自然を望む割合が増えている。
所要時間	家のすぐそば（5分以内）は自然15分以内は公園、30分以内、それ以上はまた自然と、ドーナツ型になっている。	家から15分以内は公園を望む人が少し多く、それ以外は自然が多い。ドーナツ型になっている。
利用時間	利用時間が長い人が公園を望んでいる。	利用時間が長い人が公園を望んでいる。
利用頻度	利用頻度が高い人が公園を望んでいる。	利用頻度が高い人は、自然がとてもよい、という答えが多い。
利用目的	散歩での利用者は公園を望んでいる。休息、通り道は自然を望む人が多い。	散歩での利用者は公園を望む人が少し多い。通り道での利用者は自然を望む人が多い。
整備されて変わった点	まちが活性化された、という項目では、活性化されたと考えている人は公園を多く望んでいるその他の項目ではだいたい半々である。	まちが活性化された、という項目では、活性化があまり進んでいないと考えている人は、公園を望む人が多い。その他の項目では全体的に自然が多い。
改善してほしい点	十分満足である、という項目では、満足度が高いほど公園を望む人の割合が高い。その他の項目ではだいたい半々である。	十分満足である、という項目では、満足度が高いほど自然を望む人の割合が高く、低い場合は逆に公園が多い。その他の項目ではだいたい半々である。
事故が起きた場合の責任	公園、自然との間には大きな違いは見られない。	公園、自然との間には大きな違いは見られない。

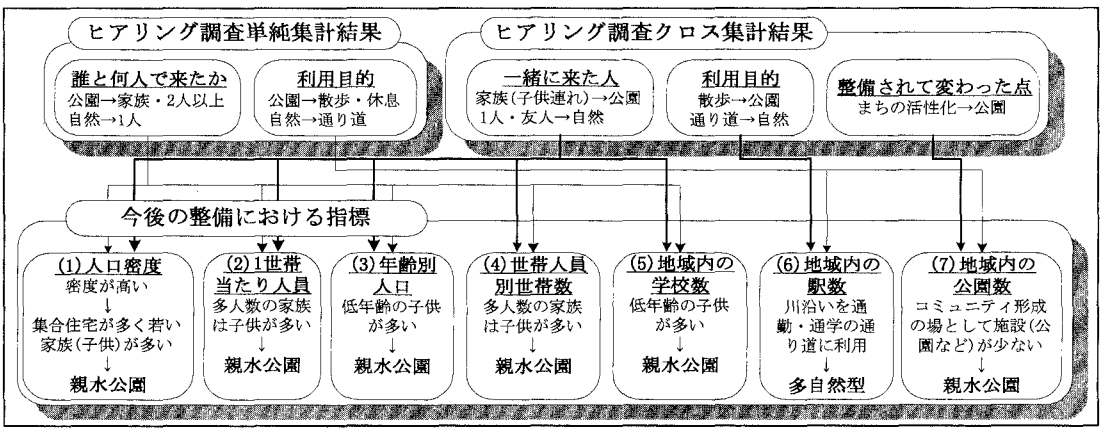

図　今後の整備における指標

5.まとめ

２つの対象地区でのヒアリング調査を通じて、その地区を実際に利用している人々の利用特性を把握することができた。また、「親水公園と多自然型川づくりではどちらを望むか」ということに関しては、利用特性による違いを見出すことができ、その結果から今後の整備方法に関する指標を導くことができた。

今回、ヒアリング調査結果から指標を導き出したが、調査を行った場所、日時などで偏りがあり、一般性に欠ける面がある。今後さらに詳しく精度の高い指標を作成するためには、より多くの事例や別の角度からの検討が必要である。そしてそれらの指標を用いて今後の整備方法について評価を行うことが課題である。

【参考文献】

・パブリックアメニティ　200例に見る実践的都市デザイン：戸沼幸市・監修　1992年２月
・まちと水辺に豊かな自然をⅡ：財団法人リバーフロント整備センター・編著　1992年２月
・まちと水辺に豊かな自然をⅢ：財団法人リバーフロント整備センター・編著　1996年７月